



Natural Colorist Geography

発行: ナチュラルカラーリスト国際本部・日本ナチュラルカラーリストスクール本部
ソフィックス研究所

URL <http://www.sofics.co.jp>, E-mail address: info@sofics.co.jp

ナチュラルカラーリストがアートで快挙

二科展に5名(6点)が入選

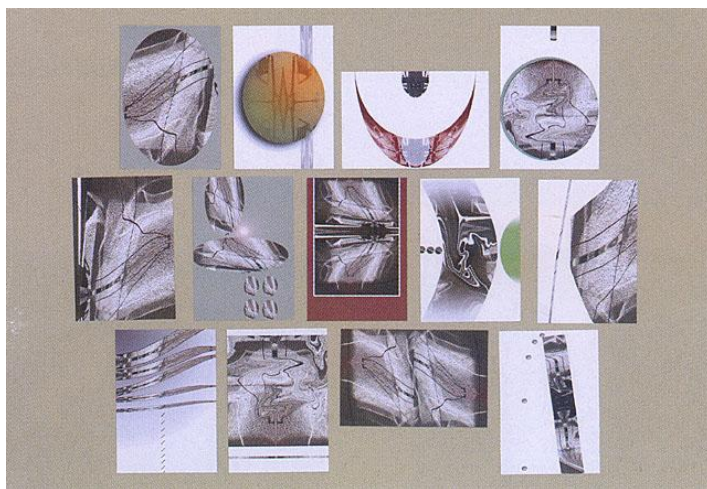
ナチュラルカラーリスト仙台校・エコアート21から

自然に学ぶナチュラルカラーリストは多方面で万能ぶりを発揮し活躍しています。今回はアートでの活躍を紹介します。初の応募にもかかわらず、どうしてこれだけまともに入選できたのか。ナチュラルカラーリストをうまく育てておられる松橋先生からチャレンジの動機や、制作意図、そして、日頃思うことについて聞きましたのでご紹介します。二科展は約100年の歴史があり多くの著名な芸術家を生んできた国内最大級の美術公募展です。

松橋ヒデ子先生のメッセージ

これまで、主にフラワーデザイン展、工芸展に応募してきましたが、ちょっと別分野にもチャレンジすることにしました。それが、誰でも知っている二科展です。94回目の重みを感じてみよう、B2のパネルに収められた平面構成ならば、どんな素材をもちいてもいいという、マルチグラフィックス部門で応募したところ、6点入選し全員ナチュラルカラーリストです。

入選した松橋先生の作品



松橋先生の制作意図

いつも通るビルの壁面に、近くのお店のステンレスの看板から、跳ね返った陽の光がおもしろい造形を凝らしていた。それを基にコンピューターグラフィックスでポストカードを制作しました。

編集者から松橋先生にいくつか質問しました。

先生にとって自然とはなんですか？

日常の目の前にある、見慣れた風景の中から何かを探そうという視点で捉えています。大きなもの、小さいものなかに含まれていたりする。日本の文化は、ときとしてそういうものだったりする。庭のススキと萩が風と一緒にゆれている様子に、99歳の母が、“ダンスしてる、風も、いいもんだ”と。またあるときは、縁側に木々の影が揺らいでいたのを見て“影もいいもんだ”と。・・・心地良く生きられる審美眼を持ち合わせて空を仰いでいたいと思います。

「ナチュラルカラーリスト（自然色彩学）」について思うことは？

色を学ぶことから、植物を観察することになり、そして、そのことから、自然を見つめる事へと、対象とする範囲は広がっていきました。いつの間にか、環境問題に関心が移り、日本人というよりも、地球人として、どうあればいいのだろうかという、問題提起をされてしまっています。知らず知らずに、本質を見抜く視点が定められている。そこに、この自然色彩学のすごさがある。自分の色彩学に留まらず、皆で、心地良く生きるには・・・と発することが、私の使命です。

エコライフについての想いは？

いつの間にか、日常のゴミに悩まされている。どうして、こうなったのだろう。 30数年前、アメリカでの食べ物のゴミの山を見て、なんてことをしているんだ！豊かで、物にあふれるということは、反面 ゴミの山をつくることになるのか、と思ったことがあります。品川の原美術館で、衝撃的な作品に出合ったのも、丁度この頃でした。それは、正面入口に、透明なプラスチックの箱に、海岸に漂着したゴミが、収められている作品でした。そういう行為の中で、何を訴えているかがわかるわけで、アートは、社会の状況と、関わりながら変化を遂げることを、いたく感じたものでした。見捨てられているものの価値を認めて制作することは、強いては、他者との関わりの中にも、そのことを見いだすことが、可能です。こうして、今日、私は「見捨てられているもの」へ光りをあてました。思考のエコライフ活動をしています。

その他の入選作品の内容は次の通りです。

メール配信の容量の関係で、この6点の作品はここには掲載できませんが、次のサイトに掲載されていますので是非ご覧ください。 [URL:www.ecoart21.com](http://www.ecoart21.com)

・丸山春江さん(新潟)

1号キャンバス9枚に、即興的に抽象画を描き葉っぱを貼ったコラージュ風なもの。

・相沢富子さん(宮城)2点入選

カラタチのとげを20枚のパーツにデザインしたもの。また、虫食いの杉の幹をスライスしたものでレリーフを。

・洞内麻由美(青森)

世界中の貧しい国々の、子供達の窮状を写真でコラージュしたもの。

・土井靖子さん(千葉)

街の車、中央分離帯の白線、建物などを写真にとり、ポジとネガで20枚焼き、それを組み合わせてヒントに、コンピューターグラフィックスでポストカードに。 さらに、10数枚を一つの作品にしたもの。

今回の応募した誰もが、いつの間にこんなところまで、きてしまったのだろうと、けげんな気分になっていたようで・・・はじまりは、フラワーデザインであり、押し花だったはずなのに・・・。しかし私にとって、受講生に大きなうねり、思考の転換を計ることが、重要だった。いつの間にか、高みに来ていたら、うれしのではないだろうか。新しいことに、チャレンジすることは、生きている証のような気がする。・・・松橋先生よりのコメント